



平成28年度 尾瀬研修 が行われました

- 1 目的・概要 日本を代表する自然公園である尾瀬国立公園を実際に訪れ、その自然地理、動物、植物、自然保護の歴史、現状などを学ぶ。特に生物の生態分野における、バイオーム、遷移、生態系のバランスなどについて現地で学習し、体験に裏付けられた知識、考え方を身につける。さらに、その成果を学校内外で発表し、科学的な思考の方法、表現の方法を身につける。
- 2 期 日 平成28年8月20日(土)～21日(日)1泊2日
- 3 場 所 尾瀬沼・尾瀬ヶ原(福島県南会津郡檜枝岐村・群馬県利根郡片品村)
- 4 宿泊所 長蔵小屋(尾瀬沼畔) 明治43年(1910)に平野長蔵が建てた小屋に始まる、歴史と伝統のある山小屋である。尾瀬における自然保護運動も学ぶことができる。
- 5 参加者 生徒7名(1年男子4名、1年女子1名、2年女子2名)、引率教員2名

6 内 容

(1) 8月20日(土)

7時00分、新潟南高校を貸切の小型バスで出発した。新潟を出発する時は晴れていたが、台風が近づいている影響で、福島県に入る頃に雨が降り出した。お昼に尾瀬の玄関である御池(ミヅウミ)に着いた頃は、かなり激しい雨であった。しかし、幸い、沼山峠を登り始める13時頃には、雨も小降りになった。毎年似たような天気である。

標高1784mの沼山峠から大江湿原までは、亜高山帯のうっそうとした針葉樹林を歩く。生物の教科書にあるように、オオシラビソ(アオモリトドマツ)の巨木がそびえ、コメツガ、トウヒ、落葉広葉樹のダケカンバの大きな木もある。林床には、マイヅルソウ、ゴゼンタチバナ、アカモノなどが生える。森林から湿原の境界には、数年前から、シカよけの柵とワナが仕掛けられている。大江湿原に入ると景色が一変し、白いイワショウブやウメバチソウ、黄色いオゼミズギク、紫のオクトリカブトやサワギキョウが見られる。秋の花であるウメバチソウやオクトリカブトが多く咲いていたので、少雪と酷暑の今年は、花の季節がやはり早く進んでいるらしい。途中、今日の宿舎である長蔵小屋を開いた平野長蔵の墓に参る。赤いヤナギランに囲まれた美しい丘にある。

長蔵小屋には15時に到着。受付をしてから、尾瀬沼ビジターセンターへ行き、予約しておいた自然観察会を受講する。担当の職員は、何年か前にもお世話になった女性の方で、佐渡出身と聞き、一層親しみを感じた。立体地図、写真帳、ぬいぐるみ、着ぐるみなどを使って、楽しく分かりやすく、尾瀬の自然、動物、植物などを解説していただいた。約1時間の短い時間であったが、大変勉強になった。①「ゴミ持ち帰り運動」の前、尾瀬はゴミであふれ、木道外を歩く人も多く、湿原は荒れていた。泥炭は1年で1mmしか堆積しない。深さ3cmの足跡は30年分。②ヨモギ、セイヨウタンポポ、コテングクワガタ、タネツケバナなど、元は尾瀬になかった植物が、人の靴について入ってきた。③木道はカラマツでできている。全長65km、1つ長さ4m、幅50cm、耐久年数7～10年、費用1mあたり10万円、敷設も大変で、簡単には更新できない。④今年は残雪が少なく、酷暑のため、花の季節は2週間ほど早く進んでいる。④ダケカンバは雪に強い。オオシラビソは雪に弱い。最近、オオシラビソに「テグス病」がはやっている。ウィルスが原因で、空気感染する。⑤ゴゼンタチバナは葉が6枚だと花、実をつけ、葉が4枚のものはつけない。ウメバチソウは1日に1つずつおしべがめしべに着くので、開花してからの日数がわかる。



写真1 自然観察会(H28/8/20 尾瀬沼)



写真2 朝の燧ヶ岳と尾瀬沼(H28/8/21)



写真3 尾瀬沼周辺の湿地(H28/8/21)

エゾリンドウは尾瀬の花の「最終ランナー」。⑦今年はツキノワグワの出現が多い。その理由は、昨年、木の実が豊作だったため。クマはミズバショウの実を食べる。あちこちのミズバショウ群落がクマに荒らされている。尾瀬には 50～60 頭いる。体長 140 cm、体重 60～80kg、月輪のないツキノワグマもいる。100m を 7 秒で走るの、逃げられない。クマに会ったら目を合わさないで後ずさりする。襲われたら、丸くなって腹、頭、首を守り、ひたすら耐えるしかない。⑧ニホンジカの被害が深刻になっている。植物を食べ、植生を壊す。寄生虫を落とすために泥で体を洗い、湿原に「ぬた場」ができる。ワナを仕掛けて捕獲する。捕まえたシカは解体し、皮は加工品に使うが、他の肉などは焼却処分する。⑨ホンドヤマネはガを食べる。ホンドオコジョは季節で毛色が変わる。オコジョを発見したら「オコジョ発見証明書」をビジターセンターから発行してもらえる。⑩尾瀬の平均気温 4℃、雪が多く、11 月にはビジターセンターのスタッフも下山する。シカの捕獲、クマ対策、登山道整備などもビジターセンタースタッフの仕事。など。

17 時 30 分から小屋で夕食をいただいた。19 時から約 45 分間、ビジターセンターでスライドショーの上映があった。昼の自然観察会と同じ内容の他にも、山、植生復元、水質浄化などの話もあった。尾瀬国立公園は平成 19 年に日光国立公園から分離独立。燧ヶ岳(ヒカガク)は火山で、標高 2356m、北海道・東北の最高峰。雪形が「ひうちばさみ」に似ていることから名がついた。至仏山は火山ではなく、蛇紋岩でできており、ホソバヒナウススキソウ、オゼソウなど珍しい植物が多い。尾瀬のトイレはその場で排泄物をバクテリアで処理している。大変費用がかかる。そのため、尾瀬のトイレはチップ制となっている。など。

20 時から、長蔵小屋のスタッフの方から、ミニプラネタリウムを上映していただいた。本当は、この晩、燧ヶ岳のご来光登山があり、プラネタリウムはできないと聞いていたのだが、私たちのために、特別に上映していただいた。このミニプラネタリウムは、仙台のある高校の文化祭で生徒が作ったものを引き取ったのだそうだ。台所のボウルを使うなど、全くの手作りである。しかし、そうとは思えないほど、臨場感のある星空が再現され、45 分ほど、語り手の巧妙な星々の物語に聞き入った。消灯は 21 時であった。

(2) 8 月 22 日(日)

予報だとくもりのち雨であったが、朝から晴天であった。早朝、長蔵小屋の裏から燧ヶ岳と尾瀬沼が、朝の光の中で、刻々と情景を変えていくのを眺めた。すばらしい体験であった。早い人は、早朝 4 時前から起きて、燧ヶ岳をご来光登山の灯が登って行くのを見たそうだ。

6 時、朝食、7 時、長蔵小屋出発。尾瀬沼に沿って歩く。針葉樹林と湿原が交互に表れ、美しい沼の情景に、生徒からも歓声の声が上がる。幹の下の部分や根が異様にねじれている大木がいくつもある。雪の影響か、萌芽更新(ボウカコシ)のためか、どのように成長したのか、不思議である。8 時 30 分頃、沼尻に着くと、あるはずの休憩所がなく、火事で焼けた跡があったのには驚いた。標高約 1700m の尾瀬沼から標高約 1500m の尾瀬ヶ原までは、オオシラビソなどの亜高山帯の針葉樹林からブナなどの山地帯の落葉広葉樹林への移行が見られる。これも生物の教科書の通りである。この間の峠道は木道もあり整備されていない。

10 時 50 分頃、尾瀬ヶ原見晴(シラシ)に着く。それまでは森林の中だったが、これからは木陰のほとんどない、直射日光の当たる湿原を歩く。尾瀬とは思えない暑さである。ヤチヤナギやナガバノモウセンゴケなど、尾瀬と北方にしか見られない珍しい植物たちを観察できた。今年は本当に、クマとシカの被害が目立つ。クマによってミズバショウ群落は荒らされ、ミズバショウの実はいくつも見られなかった。シカの「ぬた場」の泥場があちこちにあり、シカの足跡や通り道をたくさん見た。12 時頃、竜宮十字路で昼食。それからまた延々と歩く。地塘(チウ：湿原の水たまり)にはスイレンの仲間のヒツジグサの花が浮かぶ。燧ヶ岳が少しずつ遠ざかり、至仏山が少しずつ近づく。

14 時過ぎに山ノ鼻に到着。そこから、また、ブナなどの落葉広葉樹林の中、鳩待峠を目指して登る。途中、警戒の人から方から、何回も、「クマに注意してください」と声をかけられた。よほどクマが出没するのだろう。15 時 30 分、鳩待峠到着。16 時、貸切バスで出発、20 時、新潟南高校に無事到着した。

今年は、特に 2 日目、天気予報に反して天候に恵まれ、本当に充実した研修であった。毎年尾瀬に来ているが、少しずつ変化があり、時間の流れを感じる。飽きることはなく、学習することは尽きない。



写真 4 ツキノワグマがミズバショウの実を食べた跡(H28/8/21 尾瀬沼)



写真 5 ニホンジカの足跡(H28/8/21 尾瀬ヶ原)



写真 6 尾瀬ヶ原にて(H28/8/21)